

ワールドトリガー 《ASTER》 リメイク版

うたた寝犬

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

界境防衛機関「ボーダー」。

三門市に開く異世界からの侵略者「近界民（ネイバー）」から三門市を守る防衛機関。

ボーダーに所属する三雲修は近界民である空閑遊真との出会いを始め、あらゆる人との出会いや出来事を経て成長し、彼とボーダーは二度目となる近界民による大規模侵攻を乗り切った。

そしてその後、三雲修、空閑遊真、そして雨取千佳の3人は近界民の世界である「近界（ネイバーフット）」への遠征任務に就くべく、チームを組みA級昇格を目指していた。

彼らは二度のB級ランク戦を経て順位は8位まで上げ、順調に思えた。いや、順調だった。

そしてその時、もう一つの物語が動きだした…。

彼らは『地木隊』。

彼らによりもう一つの物語が動きだした。

*** **

通常投稿されている『ワールドトリガー《ASTERS》』の前身であり、原型になっている作品です。過去に投稿したものをちよこちよこリメイクして掲載していきます。

目次

第1話 「地木隊リスタート」	1
第2話 「天音神音VSラービット」	7
第3話 「地木彩笑と月守咲耶」	17
第4話 「防衛任務」	26

第1話「地木隊リスタート」

《ボーダー》

異世界から開くゲートよりやって来る近界民を撃退すべく三門市に存在する防衛機関。

彼らは多くの防衛隊員を組織に持ち、それらはS級とC級とランク分けされている。正隊員と呼ばれ実際に任務に着くのはS級とB級であり、その中でもA級とB級はチームを組み部隊ごとに活動している。

部隊を組んだ彼らはランク戦と呼ばれる試合に勝ち、階級を上げていく。

「烏丸先輩。『地木隊』って、ご存知ですか？」

玉狛支部の設備を使い、次のランク戦で当たる那須隊と鈴鳴第一隊の情報を調べていた玉狛第二部隊の隊長の三雲修が、その作業の合間に自身の師である烏丸京介にそう質問した。

『地木隊』というワードに、烏丸は少しばかり目を見開き驚いたような表情を見せた後答えた。

「もちろん知ってるが…。お前こそどこで地木隊の事を聞いたんだ？」

「えっと、那須隊と鈴鳴第一の過去のランク戦を見ていたら所々にこのチーム名が出てきていて、そこで知りました。」

「…そうか」

「このチームって、今はランク戦には居ないですよ？それで気になったと言うか、その…」

三雲は言いながら烏丸の表情がどこか苦々しいものになっていると気付き、言葉が萎んでしまった。

烏丸は三雲に地木隊の事を話さかどうか迷ったが、遅かれ早かれ知る事になる（もう名前は知ってしまった）のだから、話す事に決めた。

「修。少しお前の休憩がてら地木隊の事を話す。とりあえずリビングに行つててくれるか？」

「は、はい。分かりました」

烏丸の指示を三雲は素直に聞き入れ、普段食事を取っているリビングへと移動した。

(…さて、どうしたものか)

烏丸は三雲に何から、どこまで説明しようか思案しつつ書棚であるものを探す。

探し当てたのは一冊のアルバムにあった、一枚の写真。ボーダー本部の休憩室で撮られたであろうものであり、中学生、高校生くらいの3人の少女と1人の少年が写っている写真だった。

(これは確か……、ランク戦最終戦が終わって、順位が決定した時の写真だったかな……)

その写真をアルバムから引き抜き、烏丸は三雲が待っているリビングへと向かった。

三雲は普段食事をする時に座るいつもの席に座っていた。烏丸はそれに合わせて自身が普段座る席に座った。

「ま、過去のランク戦の記録映像見てるなら顔は分かっていると思うが、一応これが地木隊のメンバーが揃ってる写真だ」

そう言いながら烏丸はその写真をテーブルに置く。そして三雲が口を開ける前にさらに言葉を重ねる。

「修、確かにお前が言う通りで今この地木隊はいない。事情があつて休隊してるんだ」

「休隊、ですか？」

「ああ。……正直、休隊せずにこのシーズンに地木隊がいたなら、お前達のA級昇格はかなり厳しいものになったはずだ」

と、いつになく真剣な声で烏丸はそう告げた。

烏丸と、このあと地木隊について説明を受けた三雲はそれぞれ、このシーズンに地木隊がいなくてよかつたと、安堵した。

しかしこの数時間後、彼らが抱いた安心感が吹き飛ぶ知らせが、届くことになる。

*** **

ほぼ同時刻のボーダー本部。そこにある研究室に空閑遊真と彼が

所属する玉狛支部のリーダーである林藤匠は足を運んでいた。

「…んで、例のものが完成したつてのは本当かい？鬼怒田さん」

「おおーやつと完成したわい！」

到着するなり何かが完成したと喜ぶ2人だが、林藤支部長に連れてこられただけの遊真は何が完成したか解らず2人に問いかけた。

「一体何が完成したの？」

「そーいや遊真には言つてなかったな。ボードアの訓練室の仮想戦闘モードでトリオン兵と戦えるだろ？んで、この前の侵攻で敵さんが出てきた新型のトリオン兵のラービット…。あいつの戦闘データを解析してここのデータに組み込むことができたんだよ」

空閑は腕を組みやや頭を傾げ、

「ほうほう。つまりそれはどういうことだ？」

と更に説明を求めた。

今度は鬼怒田開発室長が答えた。

「つまりはここの訓練室でラービットとも戦えるということだ！奴らを持つキューブ化や液体化等は再現できなかったが、単純な戦闘能力のみならば再現できたはずなのだ！」

「…はずつてことは、完璧つてわけじゃないの？」

「…ワシらは正隊員が得た実戦やトリオン兵の残骸からデータを得てるが、それはやはり生身の生きた情報とはどうしても異なる。じゃから完璧とは言い難い」

「ほうほう」

しつかりしてるんだなと鬼怒田の事をぼんやりながらも感じた空閑は頷いた。

空閑が納得したところで林藤は、

「ま、そこでお前さんの出番つてことよ」
と告げた。

「…、ああ、実際にラービットと戦ったおれが、そのデータで再現したつていうラービットと戦えばいいのか？」

空閑は僅かに考えそう判断した。

「そういうことじゃ。同じ理由でラービットと交戦した全隊員にそう

声をかけとる。もう茶野隊あたりが訓練室に着いて早速始める頃じゃから、頼むぞ」

空閑は茶野隊って誰だっけ？と小声で林藤に聞き、「お前に向かって人型近界民だと思って撃ってきたやつら」と返された。

(ああ、ラービットにあっさり捕まってたのか)

若干失礼な記憶の仕方だった空閑だったが林藤支部長と2人で、ゆっくりと訓練室へと足を運んで行った。

*** **

(おい！この新型との訓練つてもうやっていいんだよな!?)

(そうだよ！だからお前あの子に言って来いよ！俺らが使うからって！)

訓練室にて、すでにラービットとの訓練(データテスト)を始めると思われた茶野隊だが、まだ始めることはできなかった。

何故なら彼らの前に訓練室に佇む先客の少女がいたためだ。

耳にかかる黒のショートヘアと深海の奥底を思わせるような僅かに碧みがかった黒の瞳。何を考えてるか全く読めないほどの無表情だがそれでも可愛らしいと感じる整った顔立ち。小柄で細身のシルエットのせいか、どこか儂い雰囲気の子だった。

年は多分自分たちと同じ16か、1つ下の15だろうと茶野と藤沢は思った。

(その一言だけならお前行けよ！)

(やだよ！そもそもあんな子B級にいたのかよ！)

茶野隊の2人が互いに声をかけるように言い争ってる理由として、この2人があの子の事を知らないというのがあった。

彼女が着ている隊服自体は東隊や諏訪隊が着用してるようなB級隊員に支給される隊服デザインにはんの少々ばかりのアレンジを加えたものであるし、ちゃんとB級だと刻印がされているため、彼女は間違いなくB級隊員である。

そのはずなのだが、やはり彼女の顔は記憶にない。

どちらが声を掛けるか言い争ってるうちに、その少女が動いた。訓

練室のパネルを操作し、戦闘条件を設定していく。

少女のパネル操作は素早く、茶野隊2人が『一緒に行こうぜ』と結論を出すと同時に戦闘条件を設定し終えた。

少女が施した戦闘の設定は誰からも見える可視設定にされていたらしく、訓練室の外にいた2人にも見えていた。

設定されていた条件は、

『VSラービット』

『5:00』

『トリオン無制限』

だった。

それを見た茶野隊2人は驚愕し、単体でラービット（データ）に挑む少女に声を思わず声をかけた。

「お前止めとけよーそいつマジで強えから！」

「A級の木虎が足一本犠牲にして勝つようなトリオン兵なんだぞ！俺たちB級がソロで勝てるわけないだろ！」

声は届いたらしいが、少女は彼らを一瞥しただけですぐに視線を外した。

右腰に差した孤月を左手で抜刀し、切っ先をラービットに向けて構える。奇しくもそのタイミングでラービットの実態化が完了し、ただ一人のターゲット目がけて猛然と距離を詰めにかかり、戦闘が開始された。

この時茶野隊の2人はラービットに意識を持って行かれたため、実は僅かな時間だが表示されていた少女の名前を見逃していた。

表示されていた名前は、

『天音神音』

そしてその名前の前には、

『地木隊』

そう表示されていた。

そしてさらにその前に、ほんの一瞬だけノイズがかった部隊順位が表示された。

『B級3位』

と。

第2話 「天音神音VSラービット」

右腕のモーションからラービットが殴りつける攻撃を仕掛けようとしてると瞬時に判断した天音はあえてそこから動かず、カウンターを狙った。

(コン)

ラービットの叩きつけるような殴りつけを天音はタイミングよく難なく身を引いて回避し、殴りつけによって生じた隙目がけて左手に構えた孤月をその太い腕に向けて振った。

攻撃は当たったものの、切れた感触は無かった。ラービットの腕は硬く、孤月の刃は薄っすらと傷を入れるに留まっていた。

「硬い」

ポツリと天音は呟くが、そう言うや否や後方へ大きく跳躍した。その直後、ラービットはその腕を振るって更なる殴りつけへと繋がったが、天音の跳躍はその攻撃を回避するためのものであったようでラービットの腕は虚しく宙を切った。

着地と同時に天音は孤月を構え直し、切っ先と視線をラービットへと向ける。

(腕、硬い。攻撃手段、主に腕。まずは、腕、斬り落とす)

天音がラービットの腕を斬り落とすと決めたのとほぼ同時にラービットが再び突進してきた。左右の違いはあれどもモーションはさっきの殴りつけと同じなため、タイミングも同じだろうと予想した。

そしてやはりラービットはその硬い腕をふんだんに活かした殴りつけを再び繰り出してきた。

天音は先程と同じ、いや、それ以上にタイミング良くその一撃を回避する。ただし今度は身を引くのではなく、ラービットの懐に身を屈めて潜り込む形だ。

再び殴りつけによって生じた隙に、天音は孤月を突き出した。ラービットの腕と本体を繋ぐ肩の部分にヒットしたその一撃は先程とは違い、ずぶつ、とした感触と共にラービットを貫いた。

本来、ラービットの装甲は腕が最も強固なのだが、天音は予想を立てた。

(関節、硬かったら、腕回せない……、よね?)

天音の目論見通り、その腕を振るうための関節部分は腕の装甲ほどには硬くなかった。

天音はその刺突から更に攻撃を繋げる。

ほんの一瞬だけ脱力した後、ギリつ、と奥歯を噛み締め、逆のVの字を描くように鋭くキレのある斬撃でラービットの腕を切り落とすた。

「まず、一本」

ここで天音はまたラービットから大きく距離を取るように後方へ跳躍した。

(一本、とったけど、見たことない、トリオン兵。だから、もう少し、パターン、見よう)

着地までに天音は初見で戦うラービットの攻撃パターンをもう少し見ると決めた。

着地と同時に、今度は天音から攻撃にでた。剣先をラービットから外し地面に向けた状態で一気に距離を埋める。

トリオン兵の動きは一見動物的だが、実際はプログラムに沿った理にかなうものである。

天音に腕を切り落とされプログラムが変化したのか、下段からの切り上げを放つ天音に対してラービットは殴りつけではなく頭突きでそれを相殺した。

(一撃、やっぱり重い。でも、頭は、腕ほど、硬くない)

ラービットは続けて腕による横薙ぎの一撃を放つが、天音は柔軟な身体を活かして思いつきり体勢を低くして回避する。

横薙ぎによってラービットにはガラ空きと言っても良いほどの隙が生まれたことを天音は見逃さずラービットの両脚を真一文字を引くように孤月を振り抜いた。

だが、

(目測、緩い。浅い)

その斬撃は浅く、ラービットの装甲を薄く切るに留まり切断までは至らなかった。

そこから追撃をかけた天音だったがそれは叶わなかった。

天音が振り抜いた孤月を次の一撃へと繋げるとほぼ同時に、ラービットも振り抜いたその拳を天音に向かって再び向けた。ラービットの一撃に孤月による斬撃を軌道修正して合わせた天音だったが、こればかりは悪手であった。

「っ！」

莫大なトリオンをつぎ込んでいるトリオン兵ラービットの膂力は並大抵のものではなく、その拳と天音の剣撃では単純にパワー勝負となり天音は押し負け、とんでもない速度で訓練室の壁まで吹き飛ばされた。

ゴツツ！

勢いよく壁に叩きつけられた天音だが、

(パワー、すごくある)

痛みを気にすることなく、冷静に自身の頭にインプットした。

天音はトリオン体に設定できる痛覚設定を限りなく低く設定しているためダメージらしいダメージは感じてはいないが、こうして叩きつけられると大きな隙には繋がるから気をつけよう……、と思う程度にはラービットのパワーを認識した。

(脚は、そんなに硬く、ない。あと、分からないのは、背中、と、お腹、と、…耳?)

天音は遅れながらも、ラービットの頭の両サイドに付いているレーダーの役割を果たす部分に気が付いた。大規模侵攻時にラービットと戦闘した風間はその部分を『耳』としたが、天音は耳とするか触角と判断するか迷い、とりあえず耳だと判断した。

態勢を立て直さない天音を見て追撃のチャンスと判断したのかラービットは猛然と突進し距離を埋める。

(これは、頭突き。躲して、そこから、残りの、強度、調べる)

ラービットを睨み付けた天音は一層集中して構え直した。

*** ** *

玉狛支部のリビングにて、烏丸は三雲に対して地木隊についての説明を続けていた。

「地木隊はお前がボーダーに入隊する少し前…、それでいて荒船さんが攻撃手から狙撃手にポジション変えをした少し後の時期までボーダーにいたんだ」

「えっと、僕がボーダーに入ったのは半年ほど前で、荒船さんのポジション変えがあつたのは確か8ヶ月前でしたよね?となると、だいたい7ヶ月くらい前までつてことですか?」

「そうなるな」

烏丸は休憩用にと行って出した紅茶を一口飲み、話を続ける。

「どんなチームだったかを一言では説明できないが、まあ、悪くはないチームだな。最高でB級2位、最後のランク戦も3位で終わってたはずだ」

「えっ、2位!?ですか!」

2位という順位に三雲は素直に驚いた。

現在三雲率いる玉狛第二はランク戦の途中ながらも順位は8位。最終順位では無いが、現時点で自分達よりも強いということになる。

「ああ、2位だ。しかもその時点でまだチームとしても各個人としても成長途中で、周囲は末恐ろしい奴らだと口を揃えて言っていたよ」

「…成長途中」

そう言われた三雲は改めて地木隊の集合写真を見る。

「…なんか、その、すごく若いチームですもんね」

「…。確かみんな今15、16だったはずだから、まあ、若いな。というか、見た目の年でいっただらお前らの方がよっぽど幼く見えるからな」

写真を見たまま冷や汗を流して固まった三雲に対し、とりあえず紅茶飲めと小さく烏丸は促した。

紅茶を一口飲んだ三雲は、疑問に感じていたことを烏丸に尋ねた。

「…地木隊は、なぜ今いないんですか?」

あまりにもストレートな言葉に烏丸はどう答えるか迷った。何故なら烏丸自身も地木隊が休隊している本当の理由を知っている訳で

はないからだ。

烏丸は迷った末に自分が見聞きした中でも有力な噂を三雲に伝えることにした。

「…あらかじめ言っておくが、俺もその本当の理由は知らない。だから、俺が今から言うことはあくまで『そうらしい』話だっただことだからな」

「…はいー」

三雲は姿勢を正して、烏丸の言葉を聞いた。

「…彼らが休隊した理由。それは…」

*** **

「…ん？」

訓練室に到着した空閑と林藤支部長が目にしたのは、立ち尽くす茶野隊の2人、続いてラービットとソロ戦を繰り返している黒髪の正隊員の姿だった。

「…君ら、茶野隊だよな？」

訓練室に入ってきた空閑と林藤支部長に気付かない茶野隊2人に向かって、林藤が声をかけた。

「そうです…、って、あー！林藤玉狛支部支部長！お疲れ様ですー！」

2人は振り向きなり林藤に挨拶をして頭を下げた。

それに対して林藤は手を振りながら、

「あー、そういう固い挨拶はいいから。楽にしていぞ」

と言いつつ、それに続けて、

「んで、今のこれはどんな状況な訳だ？」

林藤と空閑としては茶野隊がラービットと戦っているものだと思うっていたため、それと異なる現状に対して説明を2人に求めた。

2人の説明によれば、先客であるあの黒髪の隊員が先にラービットとの戦闘を始めてしまったらしい。

すみませんと頭を下げる2人に、「別に気にするな」と林藤はなだめる。

「……………」

一方空閑はというと、ラービットと戦う正隊員の姿をじつと見つめ

ていた。

「…お、どうした、遊真？」

林藤が声をかける。

「…いや。あいつの動き、なんか変だなんて思ってた」
「変？」

遊真は自分が感じている違和感をできるだけ上手く伝えようと言葉を選び考えた。

「…ラービットの動き出しと、回避動作が、どこかちぐはぐしてる。…攻撃が来てから避けるんじゃないかって、攻撃が来る前に回避が始まるようにみえるよ」

(回避動作がいい意味でズレる?)

空閑の言葉を聞き林藤は、もしやと思い当たる節があった。

林藤はラービットと戦う正隊員の顔を、よくよく眺めた。

その顔に林藤は覚えがあった。髪型が7ヶ月前と変わっているためすぐには気付かなかったが、彼女は紛れもなく、

「天音、だな」

林藤はもとより、本当にごく最近入隊した者を除けばボーダーのほとんどの隊員が知っているであろう地木隊のメンバーだった。

林藤が呟いたその名前を空閑は反芻する。

「アマネ？」

「ああ。あの子は、天音神音」

「アマネ、シオン」

鸚鵡返しで呟く空閑に向かって、いや、やはりただただ呟くように林藤は言った。

「…そうか。やっぱり君らは戻ってくることを選んだんだな」

そしてそうこうしてるうちに、ラービットと天音の戦闘は最終局面を迎えた。

*** **

(一番、硬いの、腕。次に頭と、背中。足と、耳、硬くない。お腹、一番脆い。もう、十分)

殴りつけ回避のために崩された態勢を立て直し、孤月を逆手に構え

直し、再びラービット目がけて距離を詰める。

(決める)

ただし、その速度は今までよりも早い。

天音はもう決めにかかる気でいたし、その戦闘を見ていた者はなんとなくでもその事を察した。

だが幾ら素早くとも、そのルートはラービット目がけて直線である。これまでの戦闘から天音はラービットは迎撃(カウンター)を選択すると踏んだが、その予想は正しくラービットの腕が殴りつけのモーションに入る。

しかし、そんなのお構い無しと言わんばりに天音はその速度を緩めず、防御も回避の素振りも見せない。

そしてラービットの拳が天音に直撃するその瞬間、

「パン」

小さく眩き、その姿が消えた。

ラービットの拳は止まらず、地面を強く殴りつけた。

それとほぼ同時、ラービットの背中にある隙間に天音の孤月が差し込まれた。

天音はこれまでの戦闘で、一定時間近距離にいた場合と背後を取った場合にラービットが高電圧による反撃を出す事を看破していた。だから天音は間合いを詰める前から、決めるならその技は速攻のモノにすると決めていた。

ラービットの背中に孤月を差し込むのと並行して、孤月のみには許された専用のオプショントリガーを発動させた。

『旋空孤月』

鏢のない日本刀を模したトリガー『孤月』。その孤月にはリーチ拡張のためのオプショントリガー『旋空』がある。

ラービットに突き刺さった天音の孤月は施空より、ラービットの内부를抉りながら拡張した。

だが天音の攻撃はここで終わらない。その突き刺した背中の際間に沿い、刃の向きへと孤月を振るった。

ザシュン！

と、どこか小気味好いとも取れる音と共に孤月が振り抜かれ、ラービットの首部分が斬られて取れかかった状態になった。そこから孤月の柄を器用に、それでいて素早く回し刃と峰の部分を180度入れ替えた。その状態で天音はその前の自身の刃の軌道をなぞるように孤月を振るい、今度は完璧にラービットの首を斬り落とした。

ゴトン、と音を立ててラービットの首が落ち、それに続いてラービットの身体が前のめりに倒れ落ちた。その鮮やかと言ってもいい切り口からは大量のトリオンが漏れ出ており、もう勝敗は明らかである。

倒れたラービットの背中から下りた天音は施空を解除し、何かを確かめるように3度ほど孤月を振るい、それから右腰の鞘に収めた。

まるでそれを待っていたかのようなタイミングで、無機質なアナウンスが流れる。

『ラービット撃破。所要時間2分54秒』

天音の勝利が、このアナウンスによって確定した。

設定していたのは一戦のみであったので、仮想訓練モードがこれによって解除されていた。

その効果音に紛れ、誰の耳にも届いてないであろう小声で天音は言った。

「…おしま」と。

戦闘中からその最後の一言を言うまで、天音は終始無表情であった。

*** **

「テレポーターで背後取ってからの施空孤月か。相変わらず鮮やかなモンだな」

「…テレポーター？」

林藤が天音の戦闘を見終えてから言った簡易な解説に含まれた1単語に空閑が疑問を示した。

「ん？ああ、遊真は直接見るのは初めてだったか。天音がラービットの背後取るのに使った瞬間移動したトリガーの事だ。便利だが制約

も多くて上級者向けのトリガーだな」

「ほうほう、なるほど。いつか使ってみたいものですね」

「あ、それから、遊真が感じ取った違和感の正体、分かったか？」

「いや、分からないままだよ。ボスは知ってるの？」

「まあ、そりやな」

「ふむ。なら、もう少し考えるよ」

「そうか」

そうして林藤が説明してるうちに、仮想訓練を終えた天音が彼らがいる方へと上がってきた。

小さな歩幅で近づいてきた彼女は林藤と目が合うなり、

「…お久しぶり、です。林藤支部長、さん」

林藤にそう挨拶をして頭をぺこりと下げた。

「おう、確かに久しぶりだな。天音神音ちゃん。君らの隊が休隊して以来だから7ヶ月ぶりくらいかな？」

「(名前、呼ばれるの、なんか、恥ずかしい) …、そう、ですね。その節、は、ご迷惑を、お掛けしました」

一度顔を上げたが天音はそこで再び頭を下げる。そしてやはりと言うべきか、この会話の中でも天音の表情は変わる事なく無表情だった。

林藤は小さく片手を振りながら、

「過ぎた事だしあんま気にすんな。それよりどうだった？さつき君が戦ったラービット」

そう問いかけられ、天音はたつぷり5秒は止まった後、

「私が、さつきまで戦ってた、トリオン兵、の、名前、ですか？」
と確認してきた。

「そうそう」

「…初めて、戦いましたけど、強かったです。手こずりました、けど、私じゃなく、て、地木隊長と、月守先輩なら、もっとうまく、対処できます」

林藤は天音の言葉に出てきた地木と月守の事を頭に思い浮かべる。

(ああ、あの2人ならそうかもな)

そんな事を考えつつ天音の言葉に対し、

「そうか」

と短く返した。

ここで天音が、チラツと右手首に巻いたリストバンド型の腕時計を見た。

その姿を見た林藤が問いかける。

「誰かと待ち合わせかい？」

「…はい」

少し間を空けて、天音は答える。

「今日、やつと皆、正式に、復隊して、この後集まるんです」と。

そしてそう言った天音の表情はさつきまでの無表情とは違い、ほんの少しだけ嬉しそうなものだど、林藤にはそう見えた。

そりと同時に林藤は、

(やっぱり復隊するのか)

と、心の中でなんとも言えない複雑な気持ちに見舞われた。

「では、失礼します」

小さな声でそう言った天音は、テテテテと効果音が付きそうな足取りで訓練室を後にした。

立ち去る後ろ姿を、林藤、空閑、茶野隊の2人は声も掛けずに黙って見送った。

第3話 「地木彩笑と月守咲耶」

「やー、復隊許してくれたしランク戦も途中参加させてくれるとか、忍田本部長はやっぱいい人だね！」

「本当にそうだよ。あーもー、マジであの人には頭上がんない」

ボーダー本部の休憩室にて、椅子に座りながらどことなく楽しそうに話す2人がいた。

1人は少年。やんわりとした黒髪に、優しげな黒の瞳。背丈は170少々ほどだが、細身な身体つきのせいかもしれない。中性的な顔立ちの、落ち着いた雰囲気の子だ。

もう1人は少女。肩まで伸ばし、染めた様子のない綺麗な茶髪。童顔ながらもはつきりとした目鼻立ち。小柄な身体つき。可愛らしい猫目のせいかな、醸し出す雰囲気の子だ。猫を連想させる少女だった。

「まあそれはさておき……。咲耶は利き手複雑骨折したまんまなんだけど、それってトリオン体になるとどーなの？」

さくや、と呼ばれた少年は負傷して未だ吊ったままの右手を見て答えた。

「あー、ちよつと前に開発室の人から聞いたんだけど、このくらいのケガだったらトリオン体に換装すれば普通に動かすこともできるんだって」

「へー、トリオン体って便利。実戦なら両手使えるってこと？」

「…ま、そうなんだけど、使わずに行こうかなって思ってる」

咲耶がそう言うと、相方の少女は怪訝な顔つきを見せた。

「一応、理由は？」

「大したモンじゃないよ。生身でもトリオン体でも動かすのは俺なんだし、トリオン体の感覚引きずって生身で右手動かして悪化させたら嫌だから」

「…そっか」

その説明を聞いた少女は背もたれにぐぐつと寄りかかる。

「転ぶぞ」

「転ばない」

咲耶は忠告したが、その少女はバランス感覚がいいのか転ぶことはなかった。

「…とか言いつつ、彩笑はどうなの？」

「うん？何が？」

さえみ、と呼ばれた少女は質問の意図が分からず聞き返した。

「7ヶ月も休んで、前と同じように動けるのかって話。彩笑の戦闘スタイルって、案外精密な動き必要じゃん」

「ああ、そんなことね」

「ちなみに神音はそこが不安だから訓練室行ってくるって言ってたけど」

「神音ちゃん、なんだかんだで真面目だねー」

のらりくらりと質問を躲す彩笑に咲耶は再度問い掛けた。

「で、彩笑はどうなの？若干心配なんだけど？」

その問いかけに対し、彩笑はにこりと笑って答えた。

「咲耶はボクを舐めすぎだよ」

と。

そして続けてこう言った。

「そんなに心配なら、今からブース行つてソロランク戦やろーよ。片腕使わないなんて舐めたこと言ってる咲耶には負けないから」

分かりやすい、明らかな挑発。だがその挑発を受けた咲耶は口を綻ばせ笑顔を浮かべた。

「いいね、のった」

そして彩笑に負けず劣らず、挑発するようにそう返した。

勝負が成立したと同時に2人は立ち上がる。ほんの一步分だけ彩笑が早く動き出した。

先に行く彩笑の後ろをついて行く咲耶は、声をかける。

「…7ヶ月も休んでれば当たり前前だけど、やっぱ懐かしいね、地木隊長？」

普段呼ぶときは下の名前を呼び捨てなのに、どこか皮肉げに呼ばれた彩笑はムツとして、歩きながら反転した。咲耶と目を合わせて、彩

笑も皮肉げにこう返した。

「そうだね。こうして部下と楽しく会話出来るのは、本当に懐かしいよ」

そう言い合う2人の表情は、誰がどう見ても笑顔としか言いようがないほどの笑顔であった。

*** **

(迷った…)

その一方、天音神音は本部内で迷子に陥っていた。方向音痴というわけではないのだが、今回ばかりは仕方なかった。

(地木隊長も、月守先輩も、見つからない。休憩室に、いるって、言っただ。けど、どこにもいない)

探すべき2人がどこにも見つからず、途方に暮れていた。

「あれ？もしかして天音ちゃん？」

「はい？」

と、迷子になっていたその天音の背後から、そう声を掛けられた。振り返るとそこには天音の先輩に当たる2人とほぼ同期入隊のメンバーが1人いた。

その3人に天音は声を掛けられたのだから挨拶することにした。以前3人とも会話をした記憶はあった。のだが…

「…えっと、名前、うる覚え、だけど」お久しぶり、です。米原先輩、水出先輩、それと緑くん」

ぺこりと頭を下げる天音だが、

「「いやいや、皆微妙に間違えて覚えてるから」」

3人同時に突っ込まれた。

(息、ピツタリ)

最初は間違えていたことに申し訳ない気持ちになった天音だったが、息が合いすぎる突っ込みに感心してしまった。

3人はここで天音にすっかり名前を覚えてもらおうと改めて自己紹介をすることにした。

「オレは三輪隊の米屋陽介だ」

「太刀川隊の出水公平」

「草壁隊の緑川駿だよ」

(ヨネヤ先輩、イズミ先輩、ミドリカワくん、よし、覚えた)

今度こそちゃんと名前を覚えた天音はきちんと3人の名前を言いつつ、

「間違えて、覚えてて、ごめんなさい」

ペこりと頭を下げて謝った。

ありがたいことに皆いい人(天音の心象的には)だったので、笑って許してくれたようだ。

「ところで、天音ちゃんがいるってことは、あの2人ももしかしているのか？」

米屋が聞こうと思ってたことを素直に聞いた。『あの2人』を地木と月守の事だと判断した天音はコクンと頷いて、

「はい。でも、本部の、どこにいるかは、わからない、です。あと、今日付けで、みんな、復隊、です」

と、小声で答えた。

それを聞いた米屋と出水は小さくガッツポーズをした。

「よねやん先輩もいずみ先輩も嬉しそうだね」

頭の後ろに両手を組みながら緑川がそう言った。

「あつたり前だろ。あの2人にはソロランク戦で借りがあんだよ。その借りを返せるチャンスがまた来たんだからな！」

そう意気込んで見せる米屋に、出水も同調する。

「別に負けてる訳じゃねーけど、アレじゃ堂々と勝ったとも言えねーからな」

テンションを上げる2人だが、緑川だけはそれに同調しかねていた。それが明らかに態度に出ていたため、米屋がそこを突いた。

「なんだ緑川。不満そうじゃねーか」

ズバツと言われた緑川は年相応に子供らしく拗ねたような口調で答える。

「不満と言われれば不満だよ、よねやん先輩。だってオレは地木先輩には負けっぱなしでポイント取られっぱなしだから、その…」

「せっかくスコープオンをマスタークラスまで上げたのにまたポイン

ト持つてかれると思うと憂鬱って感じかな？」

緑川の心象を的確に表した声が背後から聞こえてきた。思わず緑川は振り返り、

「そうーまさに、…それ…」

と言いかけて後悔した。

なぜなら緑川の気持ちを代弁した台詞を言ったのは、米屋でも出水でも、ましてや天音でもなく、今話題に上がっている張本人の地木彩笑だったからだ。

彩笑の背後には月守もいたのだが、にっこりと、誰がどの角度から見ても笑顔と言える笑顔を浮かべる彩笑によつて存在感を掻き消されかけていた。

一方緑川は「あー、やつちやつたー」と言いたげな表情を見せ、他の男子3人も「緑川やつちまつたなー」と言いたげな表情を浮かべていた。天音はいつの間にか月守の後ろに回り、安定の無表情を見せていた。

笑顔のまま、彩笑は言葉を発する。

「そつかり、駿はボクが戻つてくると不満だったのかー。悲しいなー、せつかく7ヶ月ぶりに帰ってきたのにボクは悲しいよー」

わざとらしい事極まりない口調で地木は言い、緑川はなんとか機嫌(?)を直してもらおうと、

「いやいやいやー！全然そんなことは思っけてないよ、地木先輩！これは、そうー！言葉のあやつて奴で…」

と必死に取り繕つてみせた。

彩笑は軽く自身の唇をペロツツと舐めてから、

「へー、言葉のあや、ねえ」

と念を押すように言った。

「そうー！言葉のあやー！本当は戻つてきてくれて嬉しいよー！」

緑川も念を押すように言った。

彩笑はそれをしつかりと聞くと緑川との間合いをジリジリと詰めつつ言葉を続けた。

「そうかそうか、駿はボクが戻つてきてくれて嬉しいんだね？」

「もちろん！」

緑川はこれ以上彩笑の地雷(?)を踏まないよう、素早く肯定する。

「いい子だねー、駿はいい子だねー」

「はいーありがとうございますー！」

ジワジワと緑川を追い詰めた彩笑は止めを刺しにかかる。

「そんないい子な駿は、ボクのリハビリ代わりのちよっつっつっつとしたソロランク戦に付き合ってくれるよね？」

と。

緑川は迷った。

返事を「はいー！」か「イエスー!」、もしくは「喜んで！」のどれで答えるか迷った。

彩笑はその迷った僅かな沈黙を(強引に)イエスと解釈し、一度月守を見た。

「そんなわけで、ちよつと駿と遊んでくるから」

緑川は彩笑と同じ隊のメンバーの月守先輩なら止めてくれるかもと淡い期待をしたが、

「ん、いってらしゃい」

無情にも月守は緑川を見放した。

首根つこを掴まれながらブースへと連行される緑川を見送った後、

「お久しぶりです、米屋先輩に出水先輩」

月守は何事もなかったように2人に挨拶をした。

「おう、久しぶり」

「7ヶ月ぶりだな」

そして2人も同じく、何事も無かったかのように月守と会話を始めた。

「たった今天音ちゃんに聞いたぜ。今日から復隊なんだって？」

米屋が月守に確認を取るように質問した。

「はい、おかげさまで」

月守は端的に答え、出水が続けて質問する。

「事故に巻き込まれてケガした腕は大丈夫なのか?まだ治ってないっ

「ほいけど……」

「もう片腕での生活に大分慣れましたよ、出水先輩。それに、大げさに吊ってるだけで完治はもうすぐなので心配無用です」

「にこりと笑い、月守はそう答えた。月守はそこからさらに、

「あ、そういえばこの前の大規模防衛戦、お疲れ様でした。人型近界民倒して戦功貰ったって聞きましたよ」

と、先日の大規模侵攻の話題を持ち出した。

「まあな。でもあの時は10人がかりだったしな」

当時のことを思い出しながら米屋がそう語る。

「相手はアホみてーな火力だったから10人がかりでも勝てたのは奇跡だったろ槍バカ」

出水も同じくその戦いを思い出して語る。

そして月守は2人の会話を聞いて軽く驚き、

「へえ、弾バカの出水先輩そこまで言うなんて、よっぽど火力があったんですね」

とコメントした。

「誰が弾バカだ」

「月守だって弾バカ族だろうが」

そして2人同時にツツコミを入れられた。

一本取られたと言わんばかりに、月守は苦笑してみせ、それにつられてか米屋と出水も笑ってしまった。

笑いが収まった後、月守は今度は天音に話題を振った。

「ところで神音。…もしかして、俺らのこと探した?」
と。

天音は頷いて肯定を示し、言葉を紡ぐ。

「月守先輩、達、探して、迷子に、なつて、ました」

「ごめんね、神音。それと、探してくれてありがとうね」

言葉短く月守は謝り、負傷してない左手で天音の頭を優しくなでた。

天音の無表情が少しだけ崩れ、嬉しそうに口を綻ばせた。

その様子を見て、

「お前は相変わらずなんだな」

呆れつつ出水がそう言った。

「はい？」

「いや、天音ちゃんに対して優しすぎるのが」

「当たり前ですよ出水先輩。だって俺ら地木隊が今こうしていられるのは神音のおかげなんですもん」

天音の頭を撫で続けながら月守は力説する。

出水と米屋はそんな月守を見て、

(休隊前と変わってないな)

と心の中で思った。

「ただいまー」

そしてそれとほぼ同タイミングでソロランク戦に行っていた彩笑と緑川が帰ってきた。

「「早っ!!」」

天音以外の3人が思わず同時に口にした。

ちなみに戻ってくる時も緑川は首根っこを掴まれた状態だった。

彩笑はケロッとした表情で、

「時間かけるのもアレだから3本勝負にしてきたよ。ボクの速攻2本先取勝ち」

と結果を伝えた。

「地木先輩ー、アレのどこがりハビリだったのさ。7ヶ月前と遜色ないんだけど」

首根っこ掴まれたままの緑川がぶーぶーと文句を言う。

結果を聞いた月守は天音を撫でる手を止め、にこやかに言った。

「心配して損した」

「だから言ったじゃん」

彩笑はドヤ顔でそう言い返した。

続けて言葉を紡ごうとした月守だが、

「あの、月守先輩、地木隊長、そろそろ、時間……、です、よね……?」
月守の服の裾をちよこんと引きながらの天音の言葉によりそれは叶わなかった。

「時間…？」

彩笑と月守はそれぞれ左腕に巻いたリストバンド型の腕時計を見て時間を確認した。

「やばーあと30分くらいしかないじゃん！」

「油断してたな」

そして2人とも慌てだした。

「これから何かあんの？」

米屋がその慌てぶりを見て尋ねた。

「防衛任務です！」

彩笑が素早く答える。

「服隊してすぐ防衛任務？ハードだな」

出水の呟きに対して、今度は月守が答えた。

「嵐山隊の代理です！嵐山隊は緊急で外向けのお仕事が入ったみたいで、さっき忍田本部長に復隊許可貰うと同時に代理を頼まれました」

そしてそう言うや否や、

「それでは失礼しますっ！」

「また今度お話ししましょうねー」

「えっと、お疲れ、さま、でした」

地木隊3人は三者三様にそう言い、防衛任務に就くべく駆け足で行ってしまった。

3人の姿が見えなくなると、米屋、出水、緑川がそれぞれ言った。

「…地木隊、マジで戻ってきたんだな」

「あんだけのことがあったのに、大したチームだよな」

「これから大変になりそうだね、よねやん先輩、いずみん先輩」

そう話す3人の声は、ほんの少しだけ重苦しい声だった。

第4話 「防衛任務」

三門市にはボーダー本部を中心とした警戒区域がある。放っておけば三門市のあちこちに開いてしまうゲートを誘導し、そこから侵攻してくるトリオン兵と戦う区域である。

地木隊は7ヶ月ぶりにその警戒区域に足を踏み入れ、防衛任務についていた。

「んー、駿とランク戦やってた時も思ったけど、帰ってきたって感じがする！」

人っ子1人いない警戒区域の街中を、スキップでもしそうなテンションで彩笑は歩いていた。その彩笑の左側を並んで歩くように天音が付いていき、2人の数歩後ろを月守が歩いていた。

「地木隊長、もう、怒って、ない、です、か？」

隣を歩く天音が無表情ながらも不安げな声で彩笑に尋ねた。彩笑はキョトンと一瞬だけした後笑顔になり、

「アハハ、もう怒ってないよ神音ちゃん。ありがと！」

そう言って天音の頭を撫でた。

「今日、は、2人とも、撫でて、くれた」∴、どう、いたしました？」「小首を傾げながらそう言う天音が彩笑の目にはたまらなく可愛く写り、しばらく撫で続けた。

彩笑は満足するまで天音を可愛がると、今度はクルリと180度回転し月守に向かって言った。

「でもあれはムカつくよね?! 咲耶はどう思う!？」

天音に見せていた態度すらも180度回転したかのような、怒りを含んだ声で彩笑はそう言った。月守は苦笑しつつ、

「まあ、少しはそう思ったよ」

やんわりとした声で彩笑に肯定を示した。

「だよねー!」

それを聞いた彩笑は、ビシッ!と効果音が付きそうな勢いで月守を指差した。

*** **

遡ること数十分前の出来事だ。

「…ってことで、ボク達が嵐山隊の代理で来た地木隊です。引き継ぎよろしくお願いねー」

彩笑はにこやかにそう言い、一礼した。

防衛任務交代の際には、それまで防衛任務を担当していた隊と交代する隊で引き継ぎ作業が行われる。それまでの任務中でどんなトリオン兵が攻めてきたのか、普段と異なる事はなかったか等を説明し、次の隊に任務を引き継ぐのだ。この報告は現場同士、オペレーター同士でそれぞれ行われている。

慣れれば素早く正確にできる報告作業なのだが、地木隊の直前に担当していたのは正式な隊ではなく、どこの隊にも所属していないフリーな正隊員の合同チームだった。

報告してくれたのはまだ不慣れな隊員だったようで、引き継ぎ報告があやふやだった事に加え、

「え？次の担当は嵐山隊じゃないの？」

「こいつら間違えて来たとかじゃねえの？」

「嵐山さんに会えると思ってたの……」

「てか地木隊なんていたっけ？」

報告が始まる前から報告が終わるまで、報告してくれた隊員以外の合同チームのメンバーはヒソヒソとそんな事を話していた。

報告時の並びは彩笑が少しだけ前にいて、その後ろに月守と天音が並んだ状態だったのだが、その彩笑の後ろ姿しか見えていないはずの月守ですら、

(あ、彩笑キレそう)

と判断できる程の怒気を放っていた。

彩笑は、

「正隊員は防衛任務をしつかりできてこそ正隊員。順位やポイントは二の次！」

という自論を持っているため、まだ任務を終えていないのに気の抜けたことを言っている彼等に腹を立てていたのだ。

実際はボーダー入隊時からの付き合いである月守と、同じ隊のメンバーのことはよく見ている天音だけが彩笑の怒気を察知していた。

『彩笑、落ち着いて』

月守はトリオン体に組み込まれている、特定のメンバーにのみ飛ばせる無線通信で彩笑に注意を促した。

『…こいつら何人かベイルアウトさせていい？』

彩笑は無線に応答したが月守の予想通りキレる寸前だったようだ。

『規則違反になるから駄目』

『いや、こいつらムカつくし』

『とにかく今は落ち着いて。愚痴やら何やらは後で俺が付き合うから、今は素直に引き継ぎましたって言いなよ』

『…ちっ』

月守の説得の甲斐あつてか、

「引き継ぎしました。皆さんお疲れさま！あとはボク達に任せて休んでいいよ！」

辛うじて笑顔と判断できそうな表情でそう言い、無事に引き継ぎを終えた。

引き継ぎを終えた合同チームは本部に帰投していったが、その帰る後ろ姿すら気怠げだった事に彩笑は更に苛立ち、そんな彩笑を月守が必死になだめ続けていた。

*** **

そして現在。

「うにゃー！やっぱ何回思い出してもムカつくー！」

彩笑は機嫌が直っていなかった。いや、厳密には、直ってまた悪化してをひたすらループしていた。

(よっぽどイラついてたんだな)

月守はそんな事を考えながら、変わらず彩笑の後ろに付いて歩いていた。ちなみに天音はなんとか彩笑に機嫌を直してもらおうと頑張って話しかけていた(彩笑は天音に八つ当たりすることはない)。

天音が頑張ってる訳だからなんとかこの状態を打開したいなあ、と月守はぼんやりと思考を巡らしていた。

そして、

『えーっと、テストス。ただいま無線通信のテスト中です。：皆さん、私の声は届いてますか?』

月守の思いもよらぬ方向から彩笑の機嫌を直す一手が飛んできた。

『真香ちゃん!こちら地木彩笑。真香ちゃんの声、ちゃんと届いてるよ!』

さっきまでの怒気は何処へやら、と言いたくなる程に明るく嬉しそうな声で彩笑はその無線に答えた。

『えっと、こちら、天音神音、です。真香、の、声、ちゃんと、聞こえてる、よ』

続けて天音がその声に答えた。彩笑同様に、少しだけ弾んだような嬉しそうな声でだ。

最後に月守が答えた。

『こちら月守咲耶。しっかりと聞こえてるよ、真香ちゃん』

月守も2人同様に、嬉しそうな明るい声で答えた。

3人からきちんと応答が返ってきた所で、まなか、と呼ばれたオペレーターが、

『はい、3人とも通信状態良好ですね。：復帰早々で防衛任務ですけど、頑張りましょうね』

そう答えて通信状態良好を知らせた。

『うん、頑張りっか!』

その声に彩笑はそう答えようとしたが、そう答える前に3人の無線に何か聞こえてきた。

そしてそれはよく耳を澄ませば、

『…うう、ヒック。が、がんばりばじょうう、うう』

泣きながらの、嗚咽が混じった真香の声であるのが分かった。

『ど、どうしたの真香ちゃん!?大丈夫!』

真香が泣いているのを理解した彩笑はすかさず無線で問いかけた。

ほんの少しの間を空けて、真香が答えた。

『だ、大丈夫、です。ただ、嬉しいんです。また、この4人でチームを組んで、また任務できるのが、嬉しくて泣いちゃいました!』

と。

この感受性豊かなオペレーターは和水真香（なごみまなか）。地木隊最後の、欠かす事できない4人のメンバーだ。

*** **

まだトリオン兵と一度も交戦していないが、真香の音声越しの涙で彩笑がもらい泣きしてしまったために地木隊は手頃な民家の屋根の上で休息をとっていた。

『…2人とも、もう大丈夫かな？』

ある程度タイミングを見計らって、屋根に座り込んでいた月守が問いかけた。

『あ、はい。もう大丈夫です、落ち着きましたよ月守先輩』

先に答えたのは真香だった。真香の言葉通り、落ち着いた声での返事だった。

『ボクも大丈夫だし』

続いて彩笑も答える。言葉こそ淡白だが、その実、嬉しいのだということを月守も天音も感じ取っていた。

2人とも大丈夫と言った所で月守は話を進める事にした。

『オツケー。それじゃあさ、真香ちゃん。さっきまでのチームのオペレーターから引き継いだ内容を軽く説明してくれるかな？』

『えっと、了解です。…現場との情報の擦り合わせをするって事ですか？』

真香の返事の奥には小さい音だがキーボードを叩く音が混じっていて、多分ログを遡る作業と並行して会話してるのかなと月守は思った。

『まあ、そんなとこ。ほら、久々の任務なんだし丁寧に行こうってことで』

月守はサラッとそう言ったが、実は引き継ぎ時に彩笑がいつブチ切れるかヒヤヒヤしていた為、ちゃんと聞いておらず、ここですっかり確認しとこうという意図があった。同じ理由で天音もハラハラしていて引き継ぎを聞いておらず、彩笑もイライラして内容が頭に入っていないかったのだ。実際は誰一人ちゃんと引き継げていなかったのだ。

しばらく無線からタイピング音が響いた後、真香から報告が届いた。

『前のチームの時間帯のログを見た限りだと、トリオン兵はバムスター4体にバンダー2体、あとはモールモッドが6体の計12体討伐してますね』

『んー、1任務中に12体なら量としては普通だよな』

彩笑が呟くようにそう言い、天音が頷いて肯定を示した。

『ですね。…流し読み状態でログ見ましたけど、今日はどの時間帯もこんなペースみたいです。あ、今気付いたんですけど、今日の交戦記録を見るとトリオン兵はいずれも複数で来てます。単品で来てるのは一件も無いです』

真香が追加で知らせてくれた情報を3人とも頭にインプットする。

『量は普通、でも相手は常に2体以上で出現ってことだね』

月守がざっくりとまとめて言葉に出して確認し、彩笑と天音が頷いて肯定した。

『はい、合ってます。…あ。たった今嵐山隊と本部から連絡入りしましたよ。外向けのお仕事があったより長引きそうで、この時間は丸々私たちの任務になるそうです』

真香は肯定と更に追加の情報を与えてくれた。

防衛任務に一通り必要な情報が揃うと、民家の上に座っていた彩笑が立ち上がった。

「さて、それじゃ後は作戦立てながら巡回するよ」

彩笑はそう言うと、近くの民家の屋根にヒョイつと跳び移った。

月守と天音は同タイミングで「了解」と答え彩笑の後を追った。

ヒョイ、ヒョイ、ヒョイ

と、いつくか民家の屋根の上を3人で跳び回る。

「久々なんだし、戦い方はシンプルに行こうよ」

「私、も、賛成、です」

彩笑がそう言い、天音がそれに賛成する。

それを聞いた月守は、ほんの少しだけ思索して、

「…敵が複数で来るなら、俺がそいつらを分断して浮いた奴から彩笑

と神音で倒してく、その間他の敵は俺が足止めするとかどう？」と提案した。

「ならそれで行こうよ。分断はとりあえず半分ずつで」
そしてあっさりと彩笑はその作戦を採用した。

そこで天音が小さく挙手して、月守に質問した。

「えっと、敵が、奇数だったら、どう、します、か？」

「なるべく半分近くに分断するよ。数偏ったりして上手く分断できなかったら、多い方を俺が足止めしとく」

作戦と呼ぶには大雑把だと思うが、何せ7ヶ月ぶりの実戦なのだからがつり連携を取るよりも個人の技能に任せてフォローは最低限にした方がいいと月守が判断した結果の、この作戦だった。

全体の流れを決めた所で、彩笑が次の内容に話を進めた。

「あ、神音ちゃん。ボク達の方の連携は…」

と、そこまで言った所で彩笑の言葉を遮る大きなサイレンが『警戒区域中に』鳴り響いた。

「一・二」

3人ともそのサイレンの意味をよく理解している。

任務が開始される合図であり、それはつまり、

『ゲート、開きます！』

トリオン兵がゲートを通って攻めてきたということだ。

『『場所は？！』』

『皆さんの位置から、西に850mです！』

彩笑の質問に対し真香は素早く的確に答える。

ゲートの発生日点を聞いた3人は迷わずその地点めがけて移動を開始した。

「神音ちゃん！連携は1人が敵の態勢崩してもう1人が斬るヤツで行くよー！」

「分かり、ました…！」

移動しながら彩笑と天音は簡単に連携の確認を済ませた。

それと同時に、

「現着！」

「思った、より、近かった、です」

「ゲートの感じからして、モールモッド4体くらいかな？」

地木隊3人はゲート発生ポイントに到達した。だだっ広い、大きな爆発でもあった後かのような開けた場所にゲートが開きかけていた。

ゲートが開ききる前に、再び真香から通信が入った。

『月守先輩の言う通り、モールモッド4体です！』

そしてその通信が切れると同時にゲートが完全に開き、トリオン兵が現れた。月守と真香が言う通り、自動車サイズの本体に鎌が付いた戦闘用トリオン兵『モールモッド』が4体だった。

その4体を視認した所で彩笑が合図を出す。

「戦闘開始っ！」

合図と共に、地木隊7ヶ月ぶりの戦闘が開始された。

*** **

4体のモールモッドは横並び状態でゲートから現れた。月守は負傷して吊った右腕ではなく、左腕を動かし掌を上向きにかざした状態で、

「炸裂弾（メテオラ）」

と呟いた。

呟くと同時に正方形のトリオンキューブが現れ、3×3×3の27個に分割され、放たれた。

中距離の間合いで戦うポジションの中でも、銃型トリガーを使わず弾丸を放つ者を『射手（シューター）』と言い、月守の戦闘スタイルはその射手に分類されるものであった。

月守が放ったメテオラは4体のモールモッドを2体と2体に分断するように放たれたもので、群の真ん中の地面にヒットした。

メテオラは文字通り着弾と同時に炸裂し、広範囲に攻撃できる射撃用トリガーである。月守の放ったメテオラは弾速が遅いためモールモッドはあつさり避けるが、その分威力（炸裂範囲）重視のため、大きな爆発音と共に衝撃が広がりモールモッドを完全に2体ずつ分断することに成功した。

分断を成功させた月守は叫ぶ。

「そっちは任せた！」

そして返事すら聞かぬまま、片方のモールモッド2体に向かって再びメテオラを放つ。事前に決めた作戦の通りだ。

任された彩笑も叫ぶ。

「りよーっかい！いくよ、神音ちゃん！」

そして天音と並びながら月守が分断したもう片方のモールモッド2体に向かって距離を詰めて行った。

天音は右腰に差しした孤月を抜刀しながら言う。

「隊長、先に、私、崩します」

「分かった！」

天音が前、その僅か後ろに彩笑という縦型の布陣で2人は1体目のモールモッドの間合いに入った。

モールモッドの武器は、トリオン兵の中でも屈指の硬度を誇る二本の鎌である。その二本の鎌が、間合いに入った獲物を刈り取るべく振るわれた。

(二本、同時。ううん、右の、方が、少しだけ、早く届く)

天音は瞬時に、ほぼ同時に振るわれたように見える二本の鎌の僅かなズレを見切り、対策を取った。

(サブ側、「シールド」展開)

使ったトリガーは「シールド」。その名の通り盾となるトリガーだ。特性としては、範囲を狭くすればする程耐久度が高くなる事とある程度距離を離れた所にも設置できる事。

天音は掌サイズまで狭めたシールドを、モールモッドが振るった右鎌の付け根部分に来るように展開した。防ぐ、というよりは動きを阻害するために。

ガギン！

という音と共に天音のシールドはモールモッドの右鎌の動きを止め、モールモッド全体の動きも僅かに鈍くする事に成功した。

そしてもう片方の左鎌を、

「ん」

天音は孤月を振るい下段からの切り上げを放ち、思いつき弾く形

で相殺した。

モールモツドの態勢が、大きく仰け反り崩れた。

「ナイス！」

天音が「崩しました」と声をかけるより早く、彩笑はそう言い、ザシユン！

という音と共にモールモツドの『目』の部分に両手を突き刺すような形で止めを刺していた。

「…！（隊長、やっぱり、速い…！）」

「次行くよ！今度はボクが態勢崩す！」

天音は目にも留まらぬ彩笑の速攻に呆気を取られていたが、彩笑はそんなことお構い無しのように次のターゲットを見据えた。

彩笑は止めを刺したモールモツドの目から両手を抜く。その両手には、天音と違うタイプのブレード型トリガーが握られていた。

軽量ブレード『スコープピオン』。天音の使う『孤月』と比べて脆いのだが、重さがほとんどゼロで出し入れ自由、形状を自由に変えられる攻撃用トリガーである。

彩笑はナイフ状に展開したスコープピオンを握ったまま、残ったモールモツドとの距離を一気に詰め、その間合いに躊躇なく踏み込む。天音の時と同様にモールモツドは二本の鎌を振るい攻撃するが、彩笑はそれを難なく回避して側面に回った。

「脚もらうよー！」

彩笑は普通の正隊員には反応すら困難な速度で反時計周りに動き、目にも留まらぬ速さの斬撃でモールモツドの脚を片側のみ斬り落とし、バランスを崩した。

片側のバランスが崩れたモールモツドの間を見逃さず、天音はモールモツドの目に孤月を突き刺し、そのまま上へと振り抜いた。

2体のモールモツドからはトリオンがみるみる漏出していき、やがて、

『モールモツドの反応、2体とも消えました！』

戦いをモニターでチェックしている真香から通信が入り、撃破を確認した。

「神音ちゃん、ナイス！」

彩笑はそう言いながら手を掲げている。天音はハイタッチを求められているのだと理解し、同じように手を掲げて、

「ありがと、ございます」

と言いながら2人はハイタッチを交わした。

にこやかな表情を浮かべていた彩笑だが、

「…って、まだ咲耶の方が残ってんじゃん！」

残りの2体を思い出し、そちらに目を向けた。

その視線の先には、彩笑ほどではないがモールモッド2体がかりの斬撃を上手く避けながら、細かくキューブを放って戦う月守がいた。

月守は2人の戦闘にも意識を割いていたのか、自分のことを見ている彩笑にすぐ気付き無線で連絡を入れた。

『彩笑、こいつら崩すから、それを捌いて』

その通信を聞いた彩笑が返事をするより早く、月守は行動に移った。

月守は後退しながら向かってくる2体のモールモッドに向かって、アンダースローのようなモーションで27分割したメテオラを放った。

足元に撒かれたメテオラをモールモッドは避けきれず踏みつけてしまった。

踏みつけたメテオラの爆発により、近くのメテオラが爆発、そのまま近くのメテオラが更に爆発と爆発は拡大していき、メテオラ全ての衝撃によりモールモッド2体は脚を完全に破壊された。

その光景に、彩笑は思わず笑いかけ、いや、盛大に笑いながら跳躍した。

「アシストが丁寧すぎるー！」

心の底から楽しそうに彩笑は言い、オプショントリガーを1つ展開した。

「グラスホッパー！」

展開したのは空中機動ができるジャンプ台トリガー『グラスホッ

パー』。彩笑は足元にそれを展開して、さながら弾丸のようにモールモッドに突撃した。

動きが取れずになす術のないモールモッドは、彩笑のスコープオンにあっさり切断され倒された。

モールモッドを倒して立ち上がると、その近くには月守がいた。

「倒させるスタイルは継続するわけ？」

「まあね。倒し切っても良かったけど……、久々だし、思いっきり動きたいだろ？」

「うん！さっすが咲耶！分かってるね！」

天音の時と同様に、ハイタッチを求める彩笑に月守は左手を素直に掲げて答えた。

パチン！という小気味良い音が、モールモッドの残骸が転がる警戒区域に響いた。

地木隊はその日、なんの問題もなく計15体のトリオン兵を倒し防衛任務を終えた。